

日本生態学会

No.18

2009年5月

ニュースレター

[目次]

学会賞応募要領

第8回（2010年度）「生態学会賞」候補者推薦のお願い

第14回（2010年度）「日本生態学会宮地賞」候補者募集

第3回（2010年度）「日本生態学会大島賞」候補者募集

日本生態学会第57回大会案内 1

盛岡大会と要旨集電子化のアンケート結果について 5

記 事

I. 全国委員会承認事項 8

II. 書評依頼図書 8

III. 寄贈図書 8

IV. 交換雑誌目録 8

お知らせ

1. 公募 9

書 評 9

公募カレンダー 13

京都大学生態学研究センターニュース 14

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。
会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については2007年度より冊子を必要としない会員への割引（ER 900円、生態誌 600円）を開始しました。すでに会員の方が今後申請される場合は2010年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200円 東北地区：800円 関東地区：600円 中部地区：0円
近畿地区：400円 中国・四国地区：400円 九州地区：700円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp

公 告

第 8 回（2010 年度）「日本生態学会賞」

候補者推薦のお願い

「日本生態学会賞」は、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。細則にありますように、受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

このたび、第 8 回の授賞に先立ち、会員の皆様に受賞候補者の推薦をお願いいたしたく存じます。この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、下記の要領で奮ってご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2009 年 4 月 1 日
日本生態学会会長
矢原 徹一

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの推薦用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1 - 8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2009 年 8 月 15 日（必着）

以 上

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本学会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は全国委員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日改訂)

第8回（2010年度）「日本生態学会賞」 受賞候補者推薦用紙

日本生態学会賞選考委員会委員長殿

下記の者を、日本生態学会賞に推薦いたします。

2009年 月 日

推薦者氏名： 印

連絡先：

切
り
取
り
線

記

1. 受賞候補者

氏名： 生年月日：

所属：

連絡先：

2. 推薦理由

3. 主要な業績

公 告

第 14 回（2010 年度）「日本生態学会宮地賞」 候補者募集

「日本生態学会宮地賞」は生態学に大きな貢献をしている本学会の若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。

会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、奮ってご応募、ご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2009 年 4 月 1 日
日本生態学会会長
矢原 徹一

記

1. 受賞候補者の条件：本学会の若手会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの応募（推薦）用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1 - 8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会宮地賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2009 年 8 月 15 日（必着）

以 上

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下宮地賞という）は、生態学の優れた業績を挙げた本学会の若手会員で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

(1998年3月26日改訂)

(2000年3月10日改訂)

(2002年3月28日改訂)

(2006年3月24日改訂)

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日改訂)

第 14 回 (2010 年度) 「日本生態学会宮地賞」 受賞候補者応募 (推薦) 用紙

日本生態学会宮地賞選考委員会委員長殿

下記のごとく、日本生態学会宮地賞に応募 (推薦) いたします。

2009 年 月 日

応募者 (または推薦者) 氏名 : 印

連絡先 :

記

1. 受賞候補者

氏 名 : 生年月日 :

所 属 :

連絡先 :

2. 応募 (推薦) 理由

3. 受賞対象となる研究内容 (なるべく具体的にお書き下さい。書ききれない場合は別紙添付可)

4. 業績目録 (A4 版の別紙に、論文業績、学会等での研究発表などを重要と思われるものより順にお書き下さい)

5. 主要論文の別刷 (5 編以内を添付願います)

6. 会員歴 (学会入会年、学会での研究発表歴など)

切
り
取
り
線

公 告

第 3 回 (2010 年度) 「日本生態学会大島賞」 候補者募集

「日本生態学会大島賞」は例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とした賞です。

会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、奮ってご応募、ご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2009年4月1日
日本生態学会会長
矢原 徹一

記

1. 受賞候補者の条件：本学会の中堅会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの応募（推薦）用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会大島賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2009年8月15日（必着）

以 上

日本生態学会大島賞細則

- 第1条 日本生態学会大島賞（以下大島賞という）は、例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。
- 第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日制定)

第3回（2010年度）「日本生態学会大島賞」 受賞候補者応募（推薦）用紙

日本生態学会大島賞選考委員会委員長殿

下記のごとく、日本生態学会大島賞に応募（推薦）いたします。

2009年 月 日

応募者（または推薦者）氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名： 生年月日：

所属：

連絡先：

2. 応募（推薦）理由

3. 受賞対象となる研究内容（なるべく具体的にお書き下さい。書ききれない場合は別紙添付可）

4. 業績目録（A4版の別紙に、論文業績、学会等での研究発表などを重要と思われるものより順にお書き下さい）

5. 主要論文の別刷（5編以内を添付願います）

6. 会員歴（学会入会年、学会での研究発表歴など）

切
り
取
り
線

日本生態学会第 57 回大会案内

日本生態学会第 57 回大会（公式略称 ESJ57）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

連絡先

〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学 大学院総合文化研究科 広域システム科学系

日本生態学会第 57 回大会（ESJ57）実行委員会

担当：鷺谷いづみ（大会会長）、嶋田正和（大会実行委員長）

電子メール taikai@mail.esj.ne.jp

大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/57/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページにある問い合わせページからお願いします。大会に関する最新情報は、ホームページで確認してください。

大会の概要

本大会では、公開講演会、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会、総会、受賞講演会、懇親会を行います。シンポジウムの開催形式、企画集会、自由集会につきましては、「**シンポジウム企画案の公募**」と「**企画集会と自由集会**」をご覧ください。シンポジウムと各種集会は、3月15日から19日の間に開催する予定です。

本大会は、日本生態学会員ではない方も参加できます。ただし、講演やシンポジウム等の企画提案をするには、日本生態学会員になっていただく必要があります（入会手続きについては <http://www.esj.ne.jp/esj/> を参照してください）。また、大会に参加するには、参加費を支払い、「大会規則」、「注意事項」等大会運営に関わる諸規定を遵守する必要があります。

会場・日程

本大会は東京大学駒場キャンパスを主会場として 2010 年 3 月 15 日（月）から 20 日（土）に開かれます。日程等の詳細は次号のニュースレターでお知らせします。

〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 東京大学 大学院総合文化研究科

URL:<http://www.system.c.u-tokyo.ac.jp/>

公開講演会

日本生態学会第 13 回公開講演会を以下の要領で開催する予定です。

- ・講演会タイトル：「なぜ地球の生き物を守るのか？—生物多様性条約が守る自然の価値」
- ・日時：2010 年 3 月 20 日（土）13:00～17:00
- ・会場：東京大学安田講堂
- ・内容の詳細については、次号のニュースレターで掲載いたします。

提案、申し込みなどの締め切り

各種申し込みの締め切り予定は以下の通りです。シンポジウム企画提案は 2009 年 5 月 25 日（月）から受け付けます。他の申し込み開始は、締め切りの 1 ヶ月前程度から受付ける予定です。これらのスケジュールに変更がある場合もありますので、適宜、大会ホームページで確認してください。

シンポジウム企画提案	2009年 7月 10日 (金) 17:00
企画集会申し込み	2009年 10月 23日 (金) 17:00
自由集会申し込み	2009年 10月 23日 (金) 17:00
一般講演申し込み	2009年 11月 13日 (金) 17:00
講演要旨登録	2010年 1月 8日 (金) 17:00
プレゼンファイル登録	大会の数日前

シンポジウム企画案の公募

第57回大会では、前回大会と同じ要領で、大会シンポジウムの**企画案**を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

- ・企画案は講演者が決まっていない Seeds 段階のものでもかまいません。
- ・海外研究者の招聘のリクエストも歓迎します。招聘費用を大会費用からまかなうことが出来る場合があります。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。
- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。
- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には**オーガナイザー**としての参加を要請します。オーガナイザーは日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります。
- ・大会企画委員会は**コーディネータ**を出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者（オーガナイザー）または講演者となることは出来ません。企画段階で重複が認められる場合には、コーディネータを通じて調整をお願いします。
- ・シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。
- ・大会シンポジウムの企画は、2009年7月10日（金）17:00までに大会公式ホームページからご提案ください。

企画集会と自由集会

第57回大会では、前回大会と同じ要領で、企画集会と自由集会所を募集します。企画集会と自由集会は一括して募集され、受付後に企画者の希望を考慮し、大会企画委員会によって企画集会と自由集会に割り振られます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

企画集会

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められませんが**、原則として日程の調整は行いません。

自由集会

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められませんが**、原則として日程の調整は行いません。

企画集会・自由集会ともに、企画者はC会員を含む日本生態学会会員に限ります。

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2009年10月23日（金）17:00までに大会公式ホームページからお申し込みください。

いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに特定の個人を傷つける内容を含むと判断されるものについては、その限りではありません。

企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。

提案された企画集会・自由集会の数が会場の収容可能数を上まわる場合には、同一会員が重複して複数の集会の企画者となっている提案からご遠慮いただきます。次に、大会シンポジウム企画者による提案にご遠慮いただきます。それでも数が多い場合には、自由集会は抽選によって採否を決定します。

開催の可否については、11月20日（金）までにメールでご連絡します。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、**重複講演制限の対象となりません**。

一般講演

一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。

口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。ただし、英語での発表の申し込み数によっては、分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申し込み時に適切な分野を以下のうちから3つまで選んでいただきます。**分野分けについて追加の要望が多数ある分野は、企画委員会で検討しますので、ご要望があればお寄せください。**

群落／植物個体群／植物生理生態／植物繁殖／植物生活史／送粉／種子散布／菌類／微生物／
景観生態／遷移・更新／フェノロジー／動物と植物の相互関係／進化／種多様性／数理／
動物群集／動物繁殖／動物個体群／動物生活史／行動／社会生態／分子／古生態／保全／
生態系管理／外来種／都市／物質生産／物質循環／生態学教育・普及／英語（分野は不問）

注意：

- ・一般講演の演者（登壇者及び主たる説明者）は、日本生態学会A会員とB会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、**シンポジウムの企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）**。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承ください。

ポスター賞

若手研究者を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載する予定です。

高校生ポスター発表

今回の大会では、高校生によるポスター発表を新設します。発表の申し込み方法につきましては、次号のニュースレターに掲載する予定です。高校生ポスター発表賞も設けますのでたくさんのご応募をお待ちしています。

諸経費と納入方法

大会参加費、懇親会費などは盛岡大会に準じた設定とする見込みです。諸経費の納入方法については、次号のニュースレターで詳しくお知らせします。

エコカップ 2010

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ 2010 が行われます。主催はエコカップ 2010 実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

ご意見

大会企画委員会では、大会運営についてのご意見を随時受け付けています。大会公式ホームページにある問い合わせページからお寄せください。

盛岡大会と要旨集電子化のアンケート結果について

永田尚志（大会企画委員会前委員長）

日本生態学会盛岡大会も大成功のうちに終えることができました。盛岡市内から会場が遠いため心配していた交通の問題も、幸い降雪がなかったことと、鉄道とバス会社各社の増便によってトラブルはなかったと思います。県立大学から1 kmほど離れた行先のバスに乗ってしまった参加者を、事情を知った運転手さんが県立大学まで連れて行ってくれたというエピソードもありました。広い会場で迷わないように、会場案内の方が会場には配置されていて、岩手の方々の暖かい配慮が細部まで行き届いていました。大会の成功は、大会実行委員会の組織化されたすばらしい運営、会員・参加者のみなさまのご協力の賜物です。大会企画委員会を代表して御礼を述べさせていただきます。

生態学会大会は、現地の大会実行委員会と、学会の常設委員会である大会企画委員会が協力して運営や準備を行っています。大会実行委員会は会場の準備、会場設営、大会会計等の現地の大会運営の実務を担当すると同時に、開催地に密着した企画を行っています。今回は、盛岡企画と銘打って生態学者が未来に残したい森羅万象の写真展「エコフォトアワード2009」、岩手生態学ネットワークによる展示、絵はがき販売等が行われていました。絵はがきの収益は、盛岡で行っている生態学市民講座の活動資金として利用されることになっています。大会企画委員会は、シンポジウム企画のサポート、各種集会の選定、一般講演・集会の時間割の作製、ポスター賞の運営、長期的な大会のあり方の検討等を分担しています。このように、大会実行委員会と大会企画委員会が両輪となって大会は運営されています。

本ニュースレターの「大会案内」にありますようにすでに東京大会の準備が始まっていますので、前大会企画委員会の立場から盛岡大会を総括したいと思います。精確な集計は届いていませんが、地方で開催されたにもかかわらず盛岡大会の参加者は1800名を越えたと思われます。参加者数と一般講演1040題（口頭発表：178、ポスター：862）こそ前回の福岡大会には及びませんが、集会数が公式集会60（シンポジウム24、フォーラム5、企画集会31）に自由集会27を加えた合計が87と過去最大に達しました。盛岡大会の開催された県立大学の会場では、集会のための部屋数は十分に確保できるものの各教室の定員がそれほど大きくないので集会の併走数を

増やして収容できる様にするという方針で提案された集会はすべて開催することができました。そのため、類似した集会が重複してしまうので集会数を制限して調整してほしいという意見も大会後に寄せられています。しかし、自由な形式の研究集会（企画集会・自由集会）は新しい研究課題を発展させる機能を果たしていると思います。新しい研究のシーズの源になっている発表の場を確保するため、大会企画委員会では会場に余裕のある限り、受け入れ集会数に制限を設けるつもりはありません。

現在、大会で開催される集会は、シンポジウム、フォーラム、企画集会、自由集会の4つの形式があります。大会参加者のなかにはシンポジウム、企画集会、および自由集会の違いがわからないという意見もありますので簡単に説明をしておきます。シンポジウムは大会で開催される集会で最も重要な学術集会と位置づけています。大会企画委員会のシンポジウム部会で提案を吟味して重複がある場合は調整を行いコーディネーターをつけてサポートしています。コーディネーターの役割は、論文投稿の際の編集者のようなものでシンポジウムがうまく機能するようにアドバイスを行っています。フォーラムは、生態学会から会員へ情報を届ける役割を果たしていて、各種委員会から提案されます。盛岡大会でも、学術振興会の科研・特別研究員の採択の仕組みや若手のキャリアパス支援等、若い会員に聞いてほしかったフォーラムが開催されました。

近年、自由集会が盛んに行われるようになり集会数も増加してきたため、自由集会の一部を公式行事として組み込むために福岡大会から企画集会を設けました。シンポジウムと違って企画集会の企画・内容はすべて提案者に任せていますので、大会企画委員会では内容については関与しません。そのため、企画集会はシンポジウムと差別化するために開催時間は若干短くなっています。自由集会は大会に付随して開催される非公式行事という位置づけで、大会企画委員会としては会場枠を準備するだけに過ぎません。企画集会は公式行事の記録として発表内容を講演要旨集に残しますが、自由集会は開催記録のみ残り、各発表内容の記録は一切残りません。また、公式行事である企画集会は大会期間中のコアタイムに組み込まれて開催されますが、非公式行事である自由集会は初日や最終日等の大会期間の周辺の公式行事が行われな

い時間帯に配置されることが多くなります。さらに、集会への参加資格にも差があります。公式行事である企画集会には大会登録をした方しか参加できませんが、非公式行事である自由集会には大会登録者以外の誰でも参加できます。大会企画委員会では、東京大会でも盛岡大会と同じ集会の枠組みを維持する予定です。

一方、一般講演を見てみますとポスター発表の比率が高くなり、口頭発表の比率が年々減少しています。今回は、会期中に盛岡駅前で開催講演会と自由集会が開催され県立大学の会場が丸1日使えなかったため、ポスター発表をいつもより少ない2回に分けて行いました。ポスター会場として県立大学の200mを越える長い廊下を確保できたため一度に大量のポスターを余裕を持って展示できました。そのため、ポスターをゆっくり見る時間が足りなかったという意見が届いています。また、一度に大量のポスター審査を行う必要があったため、審査員の数が不足してしまう分野もありました。会員の皆様がポスター賞の審査を依頼された場合、快く引き受けていただければ幸いです。今後、ポスター発表が増加しても1日に閲覧・審査できるポスター発表数は、今大会程度が限度のように思われます。ポスター賞の審査数を減らすため、過去に最優秀賞を受賞した方の応募を遠慮してもらったり、発表者の年齢等の制限を行うことも検討しています。将来的に発表数が増加した場合、ポスター発表から口頭発表へと回っていただく場合もあるかもしれません。今後、口頭発表を奨励するための方策も考える必要もあります。

盛岡大会では、若手支援の一環として将来計画専門委員会から要望のあったキャリアエクスペローラマーク(CEマーク)の表示を始めましたが、CEマークの説明がニュースレターのみの掲載であったためか使用者はそれほど多くありませんでした。次回からは大会プログラムにも掲載して定着をはかりたいと思っています。また、講演要旨集の電子化を見据えて、CD版の講演要旨集300枚と携帯電話で閲覧可能な要旨集のホームページも用意しました。CD版要旨集は希望者に配布予定でしたが、東京から盛岡まで2時間半で来れる利便性のためか、当日参加の方が予想以上に多くなり要旨集が不足する事態が生じたため初日しか配布できませんでした。携帯版要旨集のQRコードの宣伝不足のためか、会場で使用されている方は少ないようでした。

大会の規模が大きくなり参加者が増加するにつれて大会を開催できる会場に限られてきています。そのため、今後、使用料の高い国際会議場を利用することが多くな

ってくと予想しています。また、講演数の増加に伴って要旨集も厚くなり、要旨集に使用する紙の重量も2.5トンを越えるようになってきました。大会企画委員会では、今後、要旨集を完全電子化して要旨集にかかる経費を削減するとともに森林資源の節約を行いたいと考えています。そこで、講演要旨集の電子化に向けて、冊子体の講演要旨集の利用実態と必要性を大会参加者の皆様にアンケートをお願いいたしました。Web上のアンケートで299名、大会会場で93名の合計392名の方から意見を回収することができました。紙面を借りてアンケートに協力して下さった方にお礼を申し上げます。アンケート結果の詳細は最後に掲載してあります。

結果を見てみますと、約4割の方が大会終了後も要旨集を利用して、約1割の方が冊子体の講演要旨集が必須と答えていました。また、将来、要旨集をオンライン版のみにすることに反対を表明した方は2割に達しました。大会会場でアンケートでは、将来の完全電子化にWebでのアンケート結果より多い25%の方が反対していましたが、有意差はありませんでした。反対理由として、大会後の社内報告や所属機関に発表の証拠として報告するために冊子体が必須という意見、講演内容のメモ書きに冊子体の方が便利という意見が寄せられました。また、完全電子化に賛成されている方でも3分の1は編集済みのPDFを希望しています。編集済みのPDFの作成には冊子体と同じ額の編集費が発生しますので、編集費を捻出する必要があります。完全電子化に賛成していただいた方から、講演要旨を掲載する恒久的なウェブサイトの確保が指摘されていました。当面は、学会事務局と協力して日本生態学会の独自ドメイン(esj.ne.jp)を長期的に維持し、大会記録と一緒に電子版要旨集を収録する予定ですが、将来的には恒久的な場所に要旨集を残す方策も検討する必要があると考えています。大会企画委員会では、2割強の方が完全電子化に反対していることと、所属機関・会社への報告に冊子体が必要な方がいることに配慮して完全電子化を先送りすることにしました。しかし、全員に配布して紙資源を2.5トン浪費することはやめたいと考えています。そこで、東京大会ではプログラムのみは全員配布とし、講演要旨集は希望者のみに配布する方向で検討しています。今後も電子化に向けての課題はいくつか残っていますが、大会企画委員会で検討していく予定です。

ニュースレターNo.15で齊藤元委員長が述べたように、大会の規模が年々、大きくなってきています。盛岡大会は地方での開催でしたので、福岡大会より若干参加

者数は減少しましたが、来年の東京大会では大会参加者が2000名をはるかに越えてしまうことが予想されています。2000名規模の大会をボランティアによる手作りで運営するためには、大会運営の省力化のために大会参加者の協力が必要となります。大会の運営に協力していただく第1歩は「締め切りの厳守」です。詳細は「締め切り厳守をお願いする理由」について、大会ホームページ：http://www.esj.ne.jp/meeting/info/why_so_inflexible.html をご覧ください。

大会企画委員会は宮竹貴久新委員長のもとで4月から49名が運営部会、広報部会、シンポジウム部会、ポスター賞部会、発表編成部会に分かれて大会の準備に関わっていきます。大会企画委員会で検討しなければならない課題はまだ山積みですが盛岡大会の成果と課題を受けて、よりよい大会の実現を目指して検討を深めて参りますのでよろしく願いいたします。

講演要旨集の電子化に関するアンケート 集計結果

(2009-03-23 現在 392名回答 内紙ベース 93件)

【1】大会後、紙媒体の講演要旨集を利用することがありますか？

- ・よく利用する 29人
- ・たまに利用する 126人
- ・あまり利用しない 168人
- ・利用しない 69人

【2】「よく利用する」または「たまに利用する」と答えた方にお聞きします。あなた自身は紙媒体の講演要旨集をどのように利用するか、具体的に教えてください。(省略)

【2B】その利用に紙媒体が必要ですか？電子媒体で代用できませんか？

- ・紙媒体が必須 28人
- ・電子媒体でもよい 201人

【3】講演要旨集の電子化についてお聞きします。紙媒体の講演要旨集を廃止し、電子版のみとすることに賛成ですか？

- ・賛成 354人
- ・反対 44人

【3B】反対の理由(省略)

【4】講演要旨集を電子版で提供する場合、どのような形態を希望しますか？(複数選択可)

- ・CD配布(PDF版) 106人
- ・CD配布(HTML版) 63人
- ・オンライン版(含携帯対応版) 260人
- ・その他(【4B】内容：別紙) 34人

【5】大会会場に要旨閲覧用コンピューターを用意するなどしたうえで、将来的にオンライン版のみとすることに賛成ですか？

- ・賛成 308人
- ・反対 79人

【6】その他、プログラム・講演要旨集に関してご意見があればご記入ください。(省略)

記 事

I. 全国委員会承認事項

1. 第7回日本生態学会功労賞
中根 周歩 (広島大学大学院生物圏科学研究科)
2. 新常任委員 (任期 2009年3月~2009年12月)
原 登志彦
湯本 貴和

II. 書評依頼図書 (2008年10月~2009年4月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 多田多恵子著「身近な植物に発見 種子たちの知恵」(2008) 160pp. NHK 出版 ISBN:978-4-14-040230-6
2. 田中宏一著「野鳥に魅せられて」(2008) 228pp. ほおずき書籍 ISBN:978-4-434-12410-5
3. 安藤元一著「ニホンカワウソ 絶滅に学ぶ 保全生物学」(2008) 238pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060189-4
4. 栗原康著「生態システムと人間」(2008) 138pp. 東北大学出版会 ISBN:978-4-86163-104-7
5. 桜井英博・柴岡弘郎・芦原坦・高橋陽介共著「植物生理学概論」(2008) 230pp. 培風館 ISBN:978-4-563-07806-5
6. 馬場多久男著「花実でわかる樹木」(2009) 416pp. 信濃毎日新聞社 ISBN:978-4-7840-7093-0
7. 大串隆之・近藤倫生・仲岡雅裕編「群集生態学 4 生態系と群集をむすぶ」(2009) 256pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-346-9
8. 大串隆之・近藤倫生・仲岡雅裕編「群集生態学 5 メタ群集と空間スケール」(2009) 194pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-347-6
9. 安田弘法・城所隆・田中幸一編「生物間相互作用と害虫管理」(2009) 322pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-772-6
10. Peter Mayhew 著 江副日出夫・高倉耕一・巖圭介・石原道博訳「これからの進化生態学—生態学と進化学の融合」(2009) 280pp. 共立出版株式会社 ISBN:978-4-320-05681-7
11. デイビット・ウィルキンソン著 金子信博訳「生物多様な星の作り方 生態学からみた地球システム」(2009) 232pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01798-1
12. 大串隆之・近藤倫生・吉田丈人編「群集生態学 2 進化生物学からせまる」(2009) 332pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-344-5
13. 山岸哲編「日本の希少鳥類を守る」(2009) 366pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-777-1
14. 田中克・田川正朋・中山耕至著「稚魚生残と変態の生理生態学」(2009) 390pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-774-0

15. 菱川晶子著「狼の民俗学人獣交渉史の研究」(2009) 422pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-056305-5
16. Stepten P. Hubbell 著 平尾聡秀・島谷健一郎・村上正志訳「群集生態学 生物多様性学と生物地理学の統一中立理論」(2009) 328pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-1018-4
17. 篠田雅人編「乾燥地の自然」(2009) 214pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-3106-0

III. 寄贈図書

1. 「CSIAM 2008 abstracts book」(2008) 122pp.
2. 「うみうし通信 No.61」(2008) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
3. 「こうえいフォーラム 2009」(2009) 104pp. 日本工営株式会社技術委員会
4. 「第58回東レ科学振興会科学講演会記録」(2008) 44pp. 財団法人東レ科学振興会
5. 「2008年コスモス国際賞報告書」(2009) 62pp. 財団法人国際花と緑の博覧会記念協会
6. 「海底地質図」(2008) CD 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査センター
7. 「多摩川 121号」(2009) 20pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団
8. 「国立情報学研究所ニュース」(2009) 12pp. 国立情報学研究所
9. 東北大学杜の都女性科学者ハードリング支援事業サイエンスエンジェル編「Science Angel Book」(2009) 100pp. 東北大学女性研究者育成支援推進室
10. 「生存の条件 地球温暖化—忍び寄る危機への対応」(2009) 48pp. 財団法人旭硝子財団地球環境を考える懇談会
11. 「SESSILE ORGANISMS 第26巻第1号」(2009) 88pp. 日本付着生物学会
12. 「うみうし通信 No.62」(2009) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
13. 「作物研究所研究報告 No.10」(2009) 116pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 作物研究所
14. 「Progress in Information No.6」(2009) 82pp. National Institute of Informatics
15. 「みどりいし No.20」(2009) 50pp. 財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

IV. 交換雑誌目録 (2009年4月現在)

1. Acta Zoologica Fennica
2. adansonia
3. Annales Botanici Fennici
4. Archiv fur Molluskenkunde
5. Biodiversity Science
6. BREVIORA
7. Chinese Journal of Applied Ecology
8. Chinese Journal of Ecology
9. Entomologische Berichten
10. EXPLORATIONS

11. Folia Geobotanica
12. Journal of Plant Ecology
13. Journal of Taiwan Fisheries Research
14. Memoranda
15. MICRONESICA
16. ORSIS
17. Polish Journal of Ecology
18. Proceeding of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia
19. Scientia Marina
20. Senckenbergiana Biologica
21. Sichuan Alpine Ecology Study
22. SPIXIANA
23. Svensk Botanisk Tidskrift
24. Systematics and biodiversity
25. The BIOLOGICAL BULLETIN
26. The Botanical Review
27. The Bulletin/British Ecological Society
28. Tropical Ecology
29. ВЕСЦі АҚДЭМ ІІ НАВУК ВЕЛІАРУС І
30. ЗКОЛОГИЯ
31. Хабарлары Цэвесмця

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 平成 21 年度東レ科学技術賞

- ①当学会に関する分野で下記に該当する方
 - 1) 学術上の業績が顕著な方
 - 2) 学術上重要な発見をした方
 - 3) 効果が大きい重要な発明をした方
 - 4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献した方
- ②2件前後。1件につき賞状、金メダルおよび賞金 500 万円
- ③平成 21 年 10 月 9 日 (金) 必着
- ④日本生態学会事務局 (学会推薦が必要です)

(2) 平成 21 年度東レ科学技術研究助成

- ①当学会に関する分野で国内の研究機関において自らのアイデアで萌芽的研究に従事しており、今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者 (原則として推薦時 45 歳以下)
- ②総額 1 億 3 千万円。1 件最高 3 千万円程度まで、計 10 件程度。
- ③平成 21 年 10 月 9 日 (金) 必着
- ④日本生態学会事務局 (学会推薦が必要です)

書評

藤倉克則・奥谷喬司・丸山正編著 (2008) 「潜水調査船が観た深海生物—深海生物研究の現在—」 487pp. 東海大学出版 本体価格 6800 円 ISBN:978-4-486-01787-5

本書のタイトルをみて、「あれ?」と思った方も多いのではないと思う。“潜水調査船で”みたのではない、“潜水調査船が”“観た”のである。深海生物研究における潜水調査船の役割、それは、文字通り“観る”ことだろう。近年の日本における潜航調査は有人船と無人船によって行われ、有人潜水調査船、「しんかい 2000」(2002 年 11 月 11 日通算第 1411 潜航をもって運航中止)と「しんかい 6500」には、操縦者=パイロット (の語源はまさに水先案内人!) 2 人と乗船研究者 1 人が通常乗り組んでいる。この潜航者の目と無人探査機 (ROV) の高性能カメラが、かつて標本としてしかみることのできなかった深海の生物たちの生きた姿を鮮明に捉えてきた。200 度とも 300 度とも言われる透明な熱水のゆらぎ、鯨の骨に付着した太さ数ミリのゴカイ、水深 1100 m の海底に棲むシロウリガイの放卵放精でさえ、観察可能である。

本書は、1983 年以降 25 年間の潜航調査によって撮りためられた映像を総動員し、深海すなわち“日の目を見ない”世界の生物を系統的に解説する本である。ただし、“深海生物”の中でもかなり特殊な生物とその棲息環境に焦点が絞られている。太陽光エネルギーに頼らない生物、化学合成生物である。硫化水素やアンモニアなどの無機化合物の酸化エネルギーを用いて炭素を固定する化学合成細菌と、その宿主からなる化学合成生物群集は、1976 年に (奇しくも) ガラパゴス諸島沖で発見され、生態系の生産機構に対する常識を大きく覆した。その後の深海生物研究の重点がこのような生物におかれてきたのも無理はないだろう。

化学合成生態系は、光合成起源の有機物に乏しくエネルギー源となる無機物の供給が豊富な場所、マグマの影響を受ける熱水噴出孔やプレート収斂域に見られる湧水を中心に成立するため、その分布は地質学的な制約を強く受ける。そこで本書では、プレートテクトニクスや深海の物理・化学的環境から解説が始まっている。さらに化学合成の生化学的、進化学的、生態学的解説へと進んでおり、第一部は、深海生物 (特に化学合成生物) とその棲息環境に関する基礎的なテキストと位置付けられるだろう。この分野の研究には地質学や地球化学などの周辺分野の知識が不可欠であるにもかかわらず、その知識が生物学者を対象に体系的にまとめられたことはなく、本書はこれから深海生物の研究に参入しようとする研究者にはまたとない入門書となるはずである。

第二部では具体的に、日本近海と世界の化学合成生物群集について、多くの生態写真を添えて紹介されている。水深 80 m (鹿児島湾) から 7434 m (日本海溝)、鯨の遺骸周辺に形成される鯨骨生物群集まで、潜航研究者あるいは母船の乗船研究者として、実際にそのサイトを訪れた研究者の筆による臨場感あふれた記述が続く。各サイ

トの地質学的、化学的環境要因と群集を形成する主な種の解説とともに、発見の様子も添えられている。他の生物群集と異なり、化学合成生物群集についての情報が深海調査以前に知られていることはまずない。地質学的条件から選定した範囲を深海曳航式カメラで広く調査するか、まったくの偶然みつかるかである。日本初の化学合成生物群集の発見は、相模湾における水産資源の調査潜航時であった。ここではこのようなエピソードなど、調査に直接関わった研究者のみが知り得る情報が紹介されている。

第三部から第五部までは、各生物の紹介であるが、鮮明な生態写真や標本写真とともにその分類群の専門家による解説が付けられており、図鑑としての役割を果たす。第三部は化学合成に頼るベントスとネクトンである。熱水や湧水のような過酷な環境下で棲息できる生物は少なく、化学合成生物群集は、限られた分類群や種がエントリーすることから始まり、その後遷移していく。構成種の多くは化学合成細菌を体内に共生させる大型動物であり、まったく摂食器官を持たない環形動物であるハオリムシ類、沿岸域に分布するイガイ科二枚貝が深海に適応したと考えられるシンカイヒバリガイ類、化学合成の化石群集からも多く発見されるシロウリガイ類などである。また、自由生活の化学合成細菌を採餌するグレイザーや懸濁物食者、宿主生物の捕食者など、化学合成を行わない種も多く見られる。このことは、化学合成が食物連鎖を通して多くの生物を支えていることを伺わせる。

第四部では光合成を基本とした深海底のベントスが、第五部は深海と浅海を結ぶ中・深層のプランクトンやネクトンが取り上げられている。厳しい栄養環境への適応、というだけではないだろうが、ベントスにはユメナマコやオオグチボヤなどその色彩や形態の面で浅海に暮らす近縁種には似ても似つかぬものが多く、ここで紹介されている生態写真は貴重な資料だ。また、プランクトンには、クラゲ類やサルバ、オタマボヤなど、壊れやすく通常の採集手段では得られないものも多い。近づいただけでも水流で破壊されてしまうものもある。潜水調査船の高性能カメラと高い操作性がこのような生物の観察と採集を可能にしている。

第六部は第三～五部で紹介された各分類群の基礎的な生物学を解説している。深海調査では、浅海域ではめったにお目にかからない分類群に遭遇することも多いため、これからこの分野に参画する研究者には基礎的なテキストとなるだろう。第七部では深海生物研究に使われてきた有人無人の潜水調査船が、実際に利用した研究者、いわばユーザーの視点で紹介されている。また、付録には日本周辺の化学合成生物群集に出現するベントス種の一覧が添えられ、分類同定もままならない種が多い中、膨大な情報を整理した著者達の努力が伺える。

日本で本格的な潜航調査が開始されて25年。そのほとんどは、“採れば新種”というチャレンジャー号の時代であった。生態学者より分類学者向けのフィールドであるということか。確かに今でも深海は新種の宝庫である。しかし、“採る”だけでなく“観る”ことのできる潜水調査船は生態学者にとっても有効な武器だ。“日の

目を見ない”世界を観る……ダーウィンの気分に合わせてくれる一冊である。

(鹿児島大学水産学部附属海洋資源環境教育研究センター 山本智子)

ジョン・C・エイビス著(2000) 西田睦・武藤文人監訳(2008)「生物系統地理学：種の進化を探る」303pp. 東京大学出版会 本体価格7600円 ISBN:978-4-13-060219-8

自身の研究史や展望を語ることが、その学問分野の発展史や未来を語るようになるような者が、真に一流の科学者といえるのかもしれない。『Phylogeography: The History and Formation of Species』の著者であり、またそもそも phylogeography という語を造り(1987年)、まだ名のない時期を含め、この学問分野を「青年期」にまで育て上げた J. C. Avise は、まさにそういう研究者だろう。「系統地理学」の成人のお披露目のように前世紀最後の年に出版された上記の教科書が、2008年末に日本語に翻訳され、実にクールな装丁で出版されたので、改めて本書の古びることのない優れた内容と魅力を簡単に紹介したい。

「生物系統地理学」(以下、単に系統地理学)は、遺伝的変異や遺伝子系統樹をもとに、種の形成史や分布プロセスを追求する進化生物学のアプローチであり、分子生態学における主要分野の一つに位置付けられる。本書ではあえて狭く「遺伝子系列 gene lineages の空間的な解析」(訳書 p.7)と表現する。現在、系統地理学的手法やアプローチは、生物地理や種分化の研究のみならず、広く進化生物学あるいは保全生物学の発見・検証ツールとして活用されるようになってきている。本書は原書の出版からすでに9年が経過しており、理論・分析手法・データ量のいずれにおいても進展の急速なこの分野の現在を学び尽くすには、当然ながら不十分である。しかし、本書は、この分野がいかにも、またなぜ発展したのかを理解するための絶好の書であり、またこの分野の自然史科学としての神髄、そして潜在的な応用範囲の広さを実感するうえで、まさに「古典となるべき書」(p.iv)といえよう。そして何より生物(主に動物)の小進化史の幅広い実例が満載で、実におもしろい。

本書は全3部構成となっている。原書では単にそれらに含まれる6つの章のタイトルが記されただけであった目次であるが、訳書ではさらに2段階の見出しを詳細に示すことで読者の便宜を図っている。

本文に先立って、「ややエモーショナルな記述」としながら著者 Avise を紹介した「監訳者まえがき」(西田)は、同世代で同じ方向性をもって生物の進化史研究に取り組んできた者ならではの密度の濃い系統地理学自体のイントロダクションにもなっている。

第I部「系統地理学の歴史と概念的背景」では、まず系統地理学が何を対象とするのかについて、関連する進化生物学や生物地理学の諸分野のなかでの位置付けがなされている。第1章では特に、「独身主義」(p.21)が幸いして、系統地理学誕生・発展の立役者となった動物の

ミトコンドリア DNA (mtDNA) の進化的な特性が詳細に記されている。核 DNA、また核ゲノムの情報が現実的に利用可能になり始めた今日だからこそ、なぜ動物の mtDNA が種内の系統地理研究において重要であったのかをきちんと理解しておく必要性は高い。

第 2 章は、系統地理学を理論的に支える「合着理論」(あるいは合祖/コアレセンス理論)に関する視覚的・直感的に理解しやすい導入となっている。系統地理学は、詰まるところ、人口学的な集団の歴史と遺伝子系統(系譜)の理論的な関係(つまり合着理論)をベースにしなが、それぞれの自然史に応じた種の空間分布の時間的動態を理解しようとする学問分野だといえる。「合着」(個人的には「合祖」という専門用語的造語を好むが)とは、集団サイズが有限であれば、ある時点で存在するすべての遺伝子が過去に遡った有限時間(合着時間)内に共通祖先に行き着く(合着する)ことを意味し、現代の進化遺伝学の重要なキーワードとなっている。本章はその合着理論の基本を、数式を使わずに、いくつもの印象的な遺伝子系統樹や、重要な理論予測をわかりやすく示すグラフによって見事に説明し、まずは mtDNA、そしてそれと対比しながら核 DNA の合着過程とその周辺について、対比しながら説明する。そして種の空間分布構造である「集団構造」のなかでの遺伝子系統のふるまいを説明する。集団を異所的に隔離する地理的障壁の出現と遺伝子系統樹のトポロジーの関係(図 2.14 - 17 など)は是非理解しておきたい。階層クレード分析(NCPA)も「Templeton の方法」として簡単に紹介されている(p.59)。内容的につながる第 6 章とともに、本書の教科書としての価値を不動のものとするパートである。

第 II 部「種内系統地理学の実例」では、単一種の系統地理に焦点を絞り、常に研究の最先端を走る人類に関する事例(第 3 章)、そしてその他の多岐にわたる動物群の研究成果(第 4 章)がレビューされている。第 3 章は単に人類の進化史に関する遺伝学的研究史や(当時の)最新知見を紹介するにとどまらず、遺伝子系統樹における合着過程の意味するところがうまく理解できるよう構成されている。例えば、「イブの神話」(=極端なボトルネック)なしでミトコンドリア・イブは生じる、など(p.80)。またミスマッチ分析等の合着理論に基づく統計学的な枠組みが、人口統計学的特性(集団サイズやその変化)や分布域形成(隔離や移住)、つまり系統地理学的課題に対していかに有用であるかが具体的にイメージできるようになっている。原書の出版後、ミトコンドリア・ゲノミクスやネアンデルタール人の集団遺伝学等を経て、現在ではヒト、さらにはネアンデルタール人を含めた核ゲノムの大規模な比較が行われる時代となった。人類研究は常に系統地理学の最新手法の登竜門となる。

第 4 章は、まず系統地理分析から経験的に得られた 5 つの主要なパターンを「系統地理カテゴリー I - V」として提示し、代表的な事例とともにその成因について説明を試みている。カテゴリー分けは、分子系統樹の形(分岐の深さ)と各遺伝子系列の相互の分布パターンが基準となる。そして、動物を 14 の分類・生態グループに分け、それぞれの自然史特性に関連づけながら、その系統地理

パターンに見られる傾向を論じあげている。1990 年代までの系統地理研究を俯瞰できる非常に便利なレビューであり、また具体的な研究のヒントも多く見つけることができるだろう。

第 III 部「系譜の一致:種分化、さらに種分化を超えて」に含まれる 2 つの章は、第 I 部第 2 章とともに、系統地理あるいは種形成を深く考える者にとって必読である。第 5 章では、まず「系譜の一致 genealogical concordance」には 4 つの異なるレベル(「様相」aspect)があることを提示する。つまり、(I) 1 つの遺伝子内の各形質の情報が一致し、ある遺伝子系統樹を支持する、(II) 複数の遺伝子に基づく遺伝子系統樹が一致し、ある種や集団の系統を支持する、(III) ある地域に分布する複数の種の間で系統地理構造が一致し、共通する成因の存在を支持する、そして (IV) そのような複数種間の系統地理構造の一致がさらに生物相によって分けられた伝統的な生物地理区分と一致し、生物相レベルで共通する成因の存在を支持する、という 4 つの側面である。このうち III と IV は、「系統地理学」の旗揚げ(1987 年)に先だって、まさに Avise らにより北米南東部で行われた mtDNA の制限酵素切断長多型分析による「比較系統地理」がターゲットとした内容であり、系統地理学自体の進むべき必然的な方向性である。さまざまな生態・生息環境の動物群で比較が行われたこの北米南東部における研究をはじめ、地域的な比較分析が行われた南米、北米北西部、パナマ地峡東西、あるいはハワイ諸島などにおける事例研究が生き生きと紹介され、読んでいてとてもおもしろい。そしてしばしば直面する各レベルの「系譜の不一致」の意味や、系統地理パターンと保全単位や保護区との関わり、そして種内分化の絶対時間について広範な議論が行われている。

最終章である第 6 章は「種分化過程と拡張された系譜」と題され、系統地理学が主に扱う種内の 1 つないし少数の遺伝子の系譜に対する見方を拡張することにより、とぎれなく、より高次の系統発生に対して統合的なアプローチが可能であることを論じている。まず取り込まれるのは種内系統分化と種分化のつなぎ合わせであり、そのなかで、種の系統樹(分岐図 cladogram)が実際には無数の遺伝子系統樹の束(“雲状図 cloudogram”: p.215)であることを基本に据え、生物学的種概念(BSC)と系統学的種概念(PSC)に関する詳細な検討と融和が図られる。生殖隔離に基づく BSC のもとでは、種分化の過程でまず(派生した“新種”を除く集団からなる)側系統的な分類群が生じること、そして時間の経過とともに部分的な集団の絶滅を通じて種内の集団が単系統となることで姉妹種状態に至ることが、わかりやすい図式(図 6.2 など)と関連する例を挙げて説明されている。また少数の遺伝子系統樹と無数の遺伝子系統樹の「雲」からなる種系統樹の関係について、自身らのシミュレーションの結果を示し(図 6.9)、楽観的な結果、つまり比較的少数の遺伝子系統樹によって種の系統関係が復元されることを示している。後半では、種分化にかかる時間に関するメタ解析、遺伝子系統樹が種の系統樹と異なりやすい条件($2N_e < t_1 - t_2$)、さらには種より上のレベル

への系統地理の概念や方法の拡張について論じられ、密度の濃い、示唆に富む内容が多く含まれている。惜しむらくは、この章の翻訳の完成度が他章と比較してもかなり低いため、肝心の箇所での理解が妨げられてしまうことである。

第6章の最後に系統地理学の展開の方向性について、3点が挙げられている。まず、核遺伝子から系統地理情報を簡便に得て、複数の遺伝子座に関する洗練された合着理論が適用できるようになること、第2に多数種を対象とした比較系統地理を広範に展開すること、そして第3に系統地理情報をこれまで蓄積されてきた種の分布パターンや古生物学の情報とうまく統合していくことである。

おそらく原書の実際の執筆時からほぼ10年が経過した現在、シーケンス技術の革新やゲノムデータの蓄積によって、またベイズ推定法やコンピュータのハード・ソフト両面の発展により、人口統計学的特性や分岐年代の推定を含め、上の第1点に関する状況は着実に進展していると思われる。また実証的な研究はもはや量産体制に入ったと言えるかもしれない。しかし、今回、数年前に読んだ原書と照らし合わせながら本訳本を通読して感じたことは、今こそ、系統地理、あるいは系統地理情報を自在に用いた進化研究を深化、成熟させるステージであり、さらにはDNAバーコーディングに類した戦略的、網羅的な分析を推し進め、情報の蓄積・活用を行ってい

くべきだということである。

最後に翻訳者である3名の若手研究者に言及して、この大著の翻訳に要した苦勞に対し、尊敬と感謝の気持ちを表したい。馬淵浩司氏は特に沿岸性魚類の系統や比較系統地理の研究で著名であり、最近では琵琶湖などにすむ日本在来のコイの実態を系統地理的手法により明らかにした。向井貴彦氏は本書でも引用されている遺伝子浸透の研究(p.185)をはじめ、ハゼ類を対象とした島嶼間の比較系統地理の研究を進めている。野原正広氏はナメクジウオ類の系統に関して顕著な業績を挙げている。「監訳者あとがき」(武藤)によれば、本書の翻訳は3名がポスドク研究員として、西田氏の研究室に集っていた時期にスタートしたという。この分野の一線の研究者が訳しただけあって、本書の訳文は(一部を除いて)良質であり、読みやすい。ただ、読者としては、用語の索引に原語が併記されているとより良かったと思う。それは同時に一部に見られる訳語の不統一(例えば、*introgressive hybridization* や *Ambystoma tigrinum* など)を避けることにもつながったかもしれない。

そういった些細な点はさておき、今回本書が広く利用されやすい形で出版されたことによって、この分野を通じた生物多様性研究が日本でさらに発展することを願いつつ、本書を多くの方に薦めたい。

(京都大学大学院理学研究科 渡辺勝敏)

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

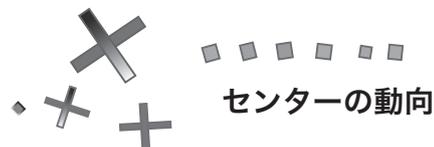
名称又は種類	授賞又は助成団体	2008年締切 (*印：2009年締切)
研究助成	財団法人 とうきゅう環境浄化財団 http://home.q07.itscom.net/tokyuenv	1月15日*
藤原賞	財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp	1月31日*
自然科学研究助成	財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp	2月 2日*
コスモス国際賞	花の万博記念コスモス国際賞委員会	4月 1日*
環境問題研究助成	財団法人 日本生命財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	4月13日*
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-bionom.htm	5月15日*
研究助成	公益信託ミキモト海洋生態研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp/	5月 8日*
研究助成	公益信託四方記念地球環境保全研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp/	5月 8日*
研究助成	公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金 http://www.jwrc.or.jp/	5月 8日*
研究助成	公益信託富士フィルム・グリーンファンド http://www.jwrc.or.jp/	5月18日*
日本学術振興会賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/	5月28日*
文部科学大臣表彰顕彰 研究調査助成	文部科学省研究振興局 財団法人 日本証券奨学財団 http://www.jssf.or.jp	7月18日 8月 8日
朝日賞 学術研究助成	財団法人 朝日新聞文化財団 藤原ナチュラルヒストリー振興財団 http://fujiwara-nh.or.jp/	8月29日 9月 1日
日産科学賞	財団法人 日産科学振興財団 http://www.nissan-zaidan.or.jp	9月15日
沖縄研究奨励賞	沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/	9月30日
木原記念財団学術賞	木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp	9月30日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月 9日*
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月 9日*
調査研究・技術開発助成	財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団 http://www.kaiyohaku.jp	10月15日
尾瀬賞	財団法人 尾瀬保護財団 http://www.oze-fnd.or.jp/	10月31日
学術研究助成	財団法人 アサヒビール学術振興財団 http://www.asahibeer.co.jp/crs/philanthropy/ab-academic/index.html	11月 6日
研究助成	財団法人 鹿島学術振興財団	11月20日
助成事業	財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 http://www.expo90.jp/	11月25日
研究助成	財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12月10日*
高木仁三郎市民科学基金	特定非営利活動法人 高木仁三郎市民科学基金 http://www.takagifund.org	12月10日



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 椿宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>



- 1) 高林純示教授が3月31日でセンター長の任期を終了し、4月1日から椿宜高教授が新センター長に就任しました。副センター長には山内淳教授が指名されました。
- 2) 2009年度外国人研究員として4月1日から7月31日まで、フランス国立科学研究センターより Fereidoun Rassoulzadegan 氏が滞在中です。
- 3) 荒木希和子氏、小林豊氏、三浦和美氏が、4月1日付けで研究員（研究機関）（任期1年）として採用されました。

お知らせ

生態学研究センターでは、毎年共同利用事業の一環として、研究会や野外実習などの公募を行っています。詳しくは当センターのホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/activities/cooperative.html>) をご参照ください。なお、2009年度の公募は2009年4月13日で締切りしました。